

## 臨床心理士Candidate (M1) のための“保育園実習”の体験報告とその考察

——人間の成長力, 幅広い人間関係能力, CPアイデンティティを中心に——

福田 麗・三谷佳子・高橋紀子

## I. はじめに

臨床心理学の実践の領域は幅広く, 教育の領域, 福祉の領域, 司法・矯正の領域, 医療の領域, 産業の領域などがある(野島,1995)。近年, 心理臨床家の必要性が注目されており, 心理臨床家を目指す者も一層増加する傾向にあり(野島,1995), これらの領域で活躍する心理臨床家も今後ますます増えていくことが予想される。

このような現状を踏まえ, 昨今, 量的に相当数に上る若い心理臨床家を育てるには計画的な教育が不可欠であることが示唆されている(村瀬,1993)。その一つとして大学院のカリキュラムについても議論がなされている。野島(1997)は, 心理臨床家をを目指す者に必要な4種類の学習を挙げている。それは①認知的学習, ②体験学習, ③実習, ④スーパービジョンである。

当大学院では修士課程1年生は, 後期から心理教育相談室で実際にケースを担当することになるが, それまでは陪席を3回するのみであり, 「体験」が少ない。したがって, (臨床心理士Candidateで

ある)筆者らは前期(平成12年4月~9月)に, 心理臨床場面と似たところがある保育園実習を通して《心理臨床類似体験》を行うことにした。

指導教官から提示された実習の目的は, ①人間の成長力, ②幅広い人間関係能力, ③CPアイデンティティーであった(Fig.1)。

しかし, 現場での具体的な実習の方法は未だに制度化どころか, その実際についても明らかにされていない。

そこで, いろいろ考えたうえで筆者らは, まだ日本では数少ない乳幼児観察を重点的に行うこととした。乳幼児観察は, 1940年代に児童心理臨床家の訓練の一つとして, ロンドンのタヴィストック・クリニックで始められた(山口,1999)。乳幼児観察の目的は幼児の対人関係の発達を記述し, 交流のパターンや行動の無意識の面を理解しようとするところにある(山口,1999; Rustin,1989)。

その中で観察者は, 強烈な情動的影響にさらされるが, 文字通り, 観察するだけで手を出さない。そして, これが治療者の訓練としての一歩の力点

## ①人間の成長力

心理臨床場面では, 健康さ, 成長力がdisturbされた人とつきあうことになるが, 健康さ, 成長力が著しい子どもとふれあうことを通して, 人間の健康さ, 成長力を実感する。

## ②幅広い人間関係能力

心理臨床場面における専門的人間関係の基礎としての非臨床場面における人間関係を体験する。

## ③CPアイデンティティー

心理臨床の視点・方法とは違う専門性である保育の視点・方法に実際に接することを通して, 両者の共通性と異質性を学ぶ

Fig.1 実習の目的

と現在考えられている（山口，1999；鈴木，1998）。なぜなら、観察者が自分に沸き起こる感情に耐え、それを抱えることができるなら、それを通してより繊細な対象の観察が可能になるからである。これが臨床場面においては、面接者が自分の感情をも含めて、その場の情動を抱えていくことに繋がっていく。

なお、実際の観察状況はFig.2に示したとおりである。

## II. 実習の体験報告

以下、3つの組の実習の報告を3つの実習の目的との関連で述べる。

### 1. A組：0歳児

#### ①人間の成長力

約5ヶ月間の中での0歳児の成長力はすさまじいものだった。最初はほとんど未歩行の子ども達であったが、実習の終わる頃にはほとんど歩行が可能となっていた。筆者はその成長の著しい過程を観察させてもらうことができ、とても貴重な経験をしたと思っている。

子ども達は自発的に、無意識のうちに新しいものを求め、手を伸ばし、足を動かしていく。体を打つても、きつい体勢になつても、それでもまた前に進む。その好奇心に導かれるままに身体を動かすことは、身体の機能を自然に発達させていく。子ども達は一つ一つの動きを精一杯やっており、そのエネルギーの消耗は子どもの長時間の睡眠の必要性をうなづかせるものだった。そして、そのあふれるエネルギーを見ていると、人間本来の成長力を実感し、信頼することができた。

また、子どもの気分の切り替えの速さにも驚かされた。遊びの移り変わりや観察者の態度の変化、

そして、担当の保育士の交代などに柔軟に応じており、その健康さを実感した。最初はこちらの方がその変化を心配になったりもしたが、見守っている内に子ども達は、いとも簡単に適応していつてしまう。こちらが関わらなくても相手に任せておける、そう信頼することができた。

子ども達は把握することができるようになると、何でも口へ持つていく。口に入れることで様々な感触を経験し、学習していつている。その中でも、みんなが気に入っているのが、丸い突起物のついた遊具。乳首を思わせるそれを子ども達はよくくわえていた。そこから、そのものがなくても代用することで満足を得る能力も感じられた。そして、子どもの一つ一つの行動にはいろんな能力の可能性が秘められているように思えた。

一歳を過ぎた子ども達はスプーンと皿を持つてつもり遊びをするようになった。また、偶然起こったことから、面白さを覚え、遊びを自ら発見していつた。子どもは成長するにつれ、顔が変わつていくが、知的な顔立ちへ変化していつているのがわかる。子ども達の学習し、創造する力に感動した。

その一方で、個人差の大きさには戸惑いすら感じた。粗大運動の発達の仕方はもちろんのこと、歯のはえ方、髪の毛の量など身体的成長力が著しい中での個人差の大きさというのは目に見えるだけあつて、とても大きいもののように感じられた。また、寝起きの違い、泣き方の違いなど個性も出始め、微笑ましく感じられることもあつた。

#### ②幅広い人間関係能力

最初、子ども達はじつと、瞬きもせず筆者の顔を見ているのが印象的だった。実際に観察しに行つたのは筆者の方だったのだが、子どもの方か

	クラス	人数	期 間	観察時間
A組	0歳児	19	2000年4月～9月 週に1回	13:00～16:00
B組	3～5歳児の	約30		9:00～12:00
C組	縦割り学級			13:00～16:00

Fig.2 観察状況

ら観察されているという感じを最初強く感じた。「この人は何者だろう」「一緒にいて大丈夫な人だろうか」。言葉にするとこんな感じでじつと見られていたように思う。人間はまず、初めての人に出会うと、こういう行動をとるものだ、ということに改めて気付かされたような気がした。そして、こちらに対して安心感を持てる人だとわかると、顔を見ただけで、につこりほほえんでくる。それから、一歳前後になってくると、しきりに指さしをして共感を求めてくる。筆者が「〇〇だねー」とそれについて言葉で返すとにつこり。観察では人間関係の持ち方の基本的な過程を一つ一つクローズアップしてみたような感じがした。その中でも“共感してほしい”という気持ちは人に対する人間の根源的な要求なのだろう、と思った。それと同時に、それに応えることの大切さも実感した。

0歳児は非言語コミュニケーションの世界である。筆者は観察の中で、子どもの視線、表情、声、体の動きなどからその子どもの気持ちを推測していくことを自然に行っていた。これは心理臨床家の訓練としても非常に役立つと思う。しかし、それだけではなく、その世界に浸っていると、そのことのもたらす偉大さも感じた。1歳過ぎの子どもが7、8ヶ月の子どもと1m程の距離を持ってコミュニケーションをとっている姿を見た。1歳過ぎの子どもの視線と表情、そして「アー」という発声と少しの体の動きだけの世界で、7、8ヶ月の子どもはきやつきやと笑っていた。しかも、そのコミュニケーションはしばらくずっと続いていた。非言語の世界での気持ちを伝える能力、そして、それを理解する能力は子どもには大人以上のものがあると感じた。一方で、子ども世界での攻撃は押す、叩くなどの直接的なもので、自傷、他傷もあり、シビアであった。成長して言葉を持つことの便利さと同時に失われるものもあることを知った。

上にきょうだいがいる1歳前後の子どもは未歩行の子どもを自分より幼いと感じ、年下の子を見るようなまなざしを向けていた。可愛い顔をして喜ばれた子どもはみんなに可愛い顔を振りまいていた。人間関係は環境の中で自然に学習されていくことを再認識した。

### ③CPアイデンティティー

最初筆者は、②の幅広い人間関係能力という目的から観察のみではそれが体験できないと感じたことと、自分自身の“手を出したい”という気持ちから子どもを抱っこしてみたりした。それから、先生が忙しいとついつい子どもを見るお手伝いもしたりして、子どもも筆者に求めてくるようになった。すると、ある時、帰る際に先生達から「ありがとうございます」といわれ、何か筆者のしているのは違うのでは、と気付いた。

心理臨床と保育の共通点は、目的としては成長の一時期を援助するという点であり、方法としては人を直接相手にすることである。

しかし、保育士の関わりは日常の中においてであり、生活習慣を身につけさせたり、しつけを行いながら発達を促していくことが専門で、このことは心理臨床家と大きく違うところである。0歳児クラスでは特に、ミルクを飲ませたり、オムツを替えたりという関わりから、保育士は代理母というイメージだった。そして、これらのことを高い声で、歌いながら関わることで、子どもたちに安心感を与え、それを楽しんで身につけさせる工夫をされていた。保育士は音楽が出来るという専門性がここに感じられた。そして発達に応じて保育室内の配置を変えたり遊具を変えたりし、発達を促す工夫を細やかにされていた。

一方、心理臨床家は身辺面の世話はしない。心理臨床家はその辺のことは相手に任せている。そこで、保育士とは子どもとの距離感が違うように感じた。心理士よりも保育士の方が直接自分の体を使うことも多く、より密着しているように思った。しかし、一方で、その中にも両者の共通点を知った。それは、“専門家はその子の親にはなれない”ということ。保育においてもこちらで抱え込むのではなく、親の役割はきちんと区別してあった。子どもの要求に何でも応えるのではなく、園に子どもを慣れさせることも保育士には必要である。そして、両者とも危険性から目は離せないが、ある程度突き放し、見守る姿勢が必要だと感じた。

他に、両者の大きな違いとして、保育は期間限定であり、その目標は一本線上にあつて、年齢によつてある程度決められているが、心理は対象年

令も様々でその目標はそのつど違う、ということがあげられる。よって、保育士は先に立って、子どもの発達をよりよく導くが、心理臨床家は子どもの後に立って、子どもに合わせて歩む。発達が遅れている子どもには、保育士とは違った心理臨床家の関わるることができる領域を感じた。心理臨床家の仕事とは、社会という集団に適応できない人々に寄り添うこと、と改めて感じた。

## 2. B組：3～5歳児

### ①人間の成長力

実習において、子ども達の成長する姿には心を動かされ、多くを学ばされた。子ども達は活発に遊びまわっており、体を動かすことがとても楽しそうであった。体全体を動かして、全力で走ったり、飛びまわったりする姿に、子ども達の中に満ちあふれているエネルギーを感じた。そして全力を振り絞って取り組むことの大事さに気付かされた。

子ども達は自分のできることを何度も繰り返して「見て、見て」と嬉しそうに披露していた。同じことを何度も繰り返す姿は、できるという感じを自分の中で確かにしているように思えた。「すごいねー」と応じると、誇らしげな笑顔を返し、次に新しいことやもつと難しいことに挑戦していった。誰かにわかってもらえる、認めてもらえることによって達成感もより根付いていくことを感じた。そして、できることを繰り返しながら自信をつけ、次に挑戦していく姿から、人間にとって、「できた」「やった」という実感を味わうことが成長の糧になるということを感じた。

保育園では、子ども達の多様な活動、遊びが繰り広げられていた。活動や遊びに夢中になって取り組んでいる姿が印象的だった。大好きな遊びをしている子どもの顔は輝いており、生き生きとしていた。砂遊びでは、土を器に入れたり、型を抜いたりを繰り返し、夢中になる姿が見られたが、よく見ると、手足で触れて土の感触を楽しんだり、器によって形を変えていくことの面白さを味わっているように思えた。また、続けていくうちに見立て遊びになり、他の子どもも加わると、今度はままごと遊びに展開していく様子が見られ、子

もの発想の面白さには感心させられた。また、根気強く土と水で上手にだんごを作っていくことにも驚き、一生懸命さに心を打たれた。一生懸命ひたむきに作っただんごは、まるでその子ども自身を表しているかのようであった。

子ども達は自然の中の細部にまで関心を払っており、大人は見過ごしてしまうような壁のすきまや木の影などの小さな空間でいろいろなものを発見していた。そこには子どもの世界が広がっていた。いろんなことを発見し、喜んだり、驚いたりすることを共感してもらうことで、さらに子どもの関心は広がり、探究心も湧いてくるようであった。活動することは身体の発達ということだけではなく、生活を充実させ、体験を豊かにしていくことになるのだと思われる。活動、遊びと精神面の発達の結びつきについて実感することができた。

### ②幅広い人間関係能力

実習では、保育士の方々とどう関係を作っていくか、保育園の中でどういうふうにいるかということが、筆者にとって難しく、大きな課題となった。保育士の方々は、常に子ども達と場をともにしており、打合せや記録などもあって、大変忙しくされていた。そんな保育士の方々に対して声をかけることがなかなかできず、居づらさを感じながら観察を行っていた。

保育士の方々とお話ができるのは、主に朝夕の挨拶時や昼食時のわずかな時間であり、そのわずかな時間は筆者にとって関係を築くうえで貴重な時間になった。また、保育士の方々の時間のある時を見つけてこちらから積極的に話したり質問すると、丁寧に応えてくださった。そうすると保育の時間でも観察している筆者に対し、子どものことや今のようなことをやっているのかについて教えてくださった。観察している時も、何気ない心遣いが嬉しく、ありがたかった。保育士の方々の保育を实践するうえでの意図や思い入れを知るためにも機会を見つけてお話することが大切に思われた。

また、子ども達は、最初の頃は観察者である筆者に大変興味を示し、いろんな質問をしてきたり、遊びに誘ったりと要求をしてきた。なかには、恥

ずかしそうに小さな声で話しかけてくる子どももいた。観察を行うということで、筆者は子ども達からの動きかけには笑顔であたたかく応じることを心掛けた。子どもが困った様子で筆者に視線を送ってきたり、転んで泣きじゃくっているところを見かけると、助けてあげたくなり、常に葛藤を抱えながら観察を行っていた。しかし、その葛藤にしばらく耐えていると、困っていた子どもは自ら動きだし、泣いている子には友達が気付いて「大丈夫？」と近寄っていったりすることがあり、子どもを信頼することの大切さについて考えさせられた。

子ども達の方も、筆者が先生でもないようだし、進んで一緒に遊んでくれるわけでもないということが徐々にわかってきたようであった。筆者の方を時々うかがいながら、活動や遊びを展開していき、あとで自分の創った物を見せてくれたりした。ごっこ遊びの中に自然と引き込んでいたり、泥で料理を作って「どうぞ」と差し出してくれることもあった。そんな時は子どもの世界につきあっていた。「ほくねー」と自分のことを得意げに話してくれる子どももいた。子ども達にとって、筆者は、子どもが必要とする時には安心して近づける存在になっていったように思われる。

### ③CPアイデンティティ

保育と心理臨床は、子どもあるいはクライアントにとっての環境や場を大切に、保育士あるいは心理臨床家がいることの影響、重要性では共通しているように思えた。保育では、一人ひとりの子どもが自分のやりたいこと、自分の好きなことを選ぶという自発的な行動を引き出せるように環境を整えることが、保育士の重要な役割となっているようであった。子どもの背丈に合わせた用具や空間、時間、そして心身の発達を促すような教材が準備されていた。それに加え、その環境において信頼できる保育士がいることが意味のあることのように思われた。保育士が同じ場にいることで、子ども達は活動や遊びに没頭することができ、何かを成し遂げた時や発見した時には保育士に嬉しそうに知らせる様子が見られた。心理臨床においても、心理臨床家とともにいて安心できる

場があることで、クライアントは自分の内面に目を向け、それを表現していくことができるのではないかと思われる。

また、子どもの活動を予測し、前もってどういう援助をすればよいか、ねらいや内容を念頭に置いておくという点でも、保育と心理臨床は共通する部分があるように思われた。ねらいは一人ひとりによって違ってくるが、保育においてのそれは発達という側面に重点を置いているように思われる。そして、保育は心理臨床とは異なり、その発達への援助が日常的な生活の中で行われており、またそこは複数の保育士や職員、他の多くの子ども達との集団生活の中である。したがって、まず保育士にとって子どもが安定した生活の中で過ごすことができるように生活の基盤である生活の流れ、リズムを作っていくことが重要になり、基本的な生活習慣の獲得を促し、日常生活の一つ一つの行為に焦点を当てて日常生活の基本を援助すること、様々な活動、遊びの中で社会性を築くなど、生活するうえで必要とされる基礎を身に付けるように具体的な援助が行われていた。

保育は、子どもと保育士のやりとり、関係性において進展していくという点で心理臨床と共通していると思われる。そこでの関わり方、援助の仕方は、保育が日常生活の一つ一つや集団のルールなどを教えること、そして時には叱るということも必要になってくるという点で異なるが、子どもの活動を見ながら、子どもがどんなふうに活動しているか、楽しいと感じているのか、生き生きとしているかなど一人ひとりの子どもの状態を捉え、子どもの気持ちに寄り添っていくという点では心理臨床と共通していると思われた。

## 3. C組：3～5歳児

### ①人間の成長力

子ども達の感性の豊かさは、想像していた以上だった。中でも好きなものへの集中力の高さと、豊かな想像力には驚かされることが多かった。

彼らの好きなこととそうでないことは、取り組む時の集中力の違いにはつきりとみてとれた。園児全員で先生を囲んで先生の話聞く場面で、その場にながらもきよろきよとして落ち着いた

かったある幼児は、先生が絵本を読み始めたときに正座になりじっと絵本を見つめていた。また、園庭で虫探しをよくする幼児は、昆虫図鑑を見る時ひとつひとつの昆虫の絵を指さして「はね、おつきーよ」「緑色濃いー」とつぶやいていた。昆虫の特徴を、それぞれの絵の比較から形や色の微妙な違いを読みとり理解していたのだろう。彼らの姿から、子どもも興味を持ったものには相当の集中力を発揮することを知った。また、その集中力は、関心のある分野を積極的に学ぶ姿勢へと繋がっているように感じた。

また、幼児は想像力を働かせることで自分が一番楽しめる遊びを知っているようだった。例えば同じ絵本一つを取ってもその楽しみ方は一人一人違っていた。一人で黙って読む子もいれば、複数集まって1冊の本を眺めたり、本を厚い順に本棚に並べる競争をする子ども達もいた。ある園児は、絵本に書いてある字を指でたどり、あたかもそれを読んでいるようなふりをしながら自作した物語を創作し話していた。それは絵から直接主人公の行動を読みとり、その時の気持ちを想像して代弁したものだった。子ども達にとって絵本とは、単に絵を見ながら物語を読むものではなく無限の可能性を持った遊び道具なのだと感じた。そこでは字が読めるか否かは絵本の楽しみ方を変える一つの要因にすぎないようだった。

これらのことから、子どもが関心を持てるものを揃え、場を整えるのは大人の役割であるが、その場を使って子どもは自力で自分自身の興味関心のある物を選び取り、集中して取り組むことができる力を十分に持っていると思った。また、子どもの世界を理解しようとする時、大人の価値基準で判断するのではなく、彼らの行動そのものの観察から学びとることの重要性を実感した。

また、子どもは他者を思いやる気持ちを自然に表現することが実に上手だった。泣き出した子どもの肩をそっと撫でたり、抱き締めて「大丈夫よ。」と優しく声をかけることが自然にできた。

この子どもの豊かな感性を育てていけるよう、子どもの気持ちに寄り添いながら援助していくことが大切だと思った。

## ②幅広い人間関係能力

実習において一番難しかったのは、保育士の方々との関係作りだった。保育士の方々には毎日大変忙しく、休憩時間も記録付けや行事準備のための話し合いの時間にあてていらっしやった。お手伝いできることも見あたらず、初めのうちは保育士の方々とうまく関係を作っていっただけの分からなかった。保育士の方から「保育士の実習生なら教えてあげられることがあるんだけど。心理の実習生には何を言ったらお役にたてるのかわからない」と言われたこともあった。もともと心理臨床家がない職場に心理の実習生がどう居ればいいのかお互いに分からないところがあったように感じる。この疑問は心理の仕事と保育園とを直接結びつけて考えすぎていたためなのではないかと思う。一実習生として考えれば、現場のスタッフの方々に対してどう接していけばいいのかは、実習場所がどこであろうと同じであろう。このことに気付いたことでずいぶん楽になれた。異業種の方との関わりでも、必要となるのはまず一般的な人間関係能力であると思った。

昼食時間や休憩時間は多忙な保育士の方々とお話できる貴重な時間だった。雑談をされる時は積極的にその輪に入っていくようにした。僅かずつでも語り合う機会を多く持つことが、相手との関係作りには必要だと実感した。また、雑談になると逆に保育士、実習生としての関係がとりやすくなったように思う。雑談の中で、保育士と心理臨床家とで、子どもの理解の仕方や関わり方にどのような違いがあるのか、心理の実習生から保育士の子どもの関わり方はどのように移るのか尋ねられることもあった。

今回の実習で得た経験は、今後現場にでた際の人間関係作りのヒントになると思われる。

## ③CPアイデンティティ

保育園の教室には、色紙や鉛筆、ピーズ等が子どもの手に届く高さの棚に整然と並べられていた。子どもはその中から好きなものを選び、うまくいかない時は先生に助けを求めた。このように子どもがのびのびと遊ぶのに必要な環境を整え、取り組みを見守る保育士の姿勢は、心理臨床家がカウ

ンセリングの枠組みを決め、クライアントの流れを見守る姿勢と共通するよう思う。

また保育園は子どもが初めて親元を離れ、多くの子ども達と共に過ごす場である。ここで彼等は同年令・異年令の子どもとの多様な人間関係の中で生活し、集団生活に必要なルールを学ぶ。そこで保育士には子どもが十分な社会性を身につけられるよう教育指導的関わりも必要になる。生活のリズムを変えないように、本人がぐずるのを叱るときもある。心理臨床家が子どもを叱ることは滅多にないと思われるが、この関わりの違いは子どもへアプローチしたい部分の相違から生まれるものだと思われる。

保育士の方々は、園児全員を見渡ししながら、一人一人の様子にも目を配り、個人の性格や人との関わり方について詳しく把握しておられた。それゆえその日の食事の進み具合や遊びの仕方から普段と違う様子である時は、それを敏感に察知された。しかし保育の現場では、気になる子どもがいても、その子だけと継続的な関わりを持つことは現実的に難しい。そこで保育士の方々は子どもに直接働きかけられない時は、気付いた点を迎えてきた母親に報告されていた。保育士の観察眼は、単に保育士が子どもの様子を把握するに留まらず、母親が子どものシグナルを見落とさないよう橋渡しする役割を果たしていた。このような保育士の関わりから、子どもの心理面の変化は日常の行動に現れやすく、それを察知するには、普段の様子を詳しく把握していなくてはならないことを学んだ。また、子どもと母親の関係性がまず基本にあり、心理臨床家や保育士はその関係を補佐する立場にあることを自覚した。そして心理臨床家が臨床現場で子どもと関わる場合には、母親からの情報で子どもの普段の様子を把握することが、いかに重要であるかを知ることができた。

### III. 考 察

以下、3つの実習の目的(①人間の成長力、②幅広い人間関係能力、③CPアイデンティティー)との関連で考察を行う。

#### 1. 人間の成長力

保育園には0歳から6歳までの子ども達がいる。子ども達はその6年間に日に日に成長していつている。筆者らは、その成長の過程を約5ヶ月間、観察させていただいたのだが、観察の対象年齢が違っても、皆が同じように、同じような視点で、その健康さ、成長力を充分に実感することができたようである。

子ども達は「活発に動き回っており、体を動かすことがとても楽しそう」であった。「自発的に、無意識のうちに新しいものを求め」ていく、そのエネルギーに満ちあふれる姿は頼もしい限りであったように思う。ちょうど、この合間に精神科の病院実習にいった筆者らには、その「満ちあふれているエネルギー」を健康な子どもの中により感じる事ができたのではないだろうか。

そして、その身体を動かすことが身体の発達のみではなく、「精神面の発達」と結びついていることもそれぞれ実感したようだ。よって、それを(1)集中力、(2)自分のものにしていく力、(3)想像力、(4)柔軟性という4つの視点から考察したいと思う。

##### (1)集中力

子どもは興味を持ったものには「夢中になって」取り組み、そこからは、「積極的に学ぶ姿勢」も感じられた。そして、その時の子どもの顔は、「輝いて」、「生き生きとして」いた。子ども達は主体性を持って、学習しており、筆者らはその姿に皆、心を打たれたようだ。

##### (2)自分のものにしていく力

できることを繰り返す子ども達の姿もよく見られた。それは、「できる感じを自分の中で確かにして」いつているようで、それで、「自信をつけ」、「成長の糧」にして「次にもっと難しいことに挑戦していく」ように思われた。そして、その過程では、「共感してもらうこと」の重要性が示唆された。

##### (3)想像力

子ども達の間では「多様な活動、遊びが繰り広げられて」おり、「個性」や「個人差」も感じられた。子ども達は一つの遊具から、無限の可能性を持った遊びを発見して、展開させており、遊びを通して考える力も身につけていつていた。その「豊かな想像力」も然る事ながら、「想像力を働かせることで自分が一番楽しめる遊びを知っている

時に安心して近づける存在になっていったのだろうと思われる。

観察の中で、実習生は、子どもの視線、表情、声、体の動きなどからその子どもの気持ちを推測し、また、子どもがどのような気持ちで遊びや活動を行っているのか、その行動はどんな意味があるのかなどを考えるということを行っていった。このことは心理臨床家の訓練としても非常に役立つこととなった。そして、子どもの世界に浸ることで、その偉大さ、奥深さを感じる事ができた。

### 3. CPアイデンティティ

今回の実習で、保育士の方々子どもと関わる現場を見学する機会を得た。これまで子どもへの援助について知っていることは、全て心理臨床の立場から学んだ知識であった。今回は異なる専門的立場との比較を通して、改めて子どもを援助する際の視点・方法について考えることになった。双方の視点・方法の共通点から、専門的な立場を超えて子どもの成長を援助する上で必要なものは何かを考え、両者の関わりの違いから、どこに心理臨床家の専門性があるのか具体的に認識できるようになったと思われる。

保育士と心理臨床家の子どもへの関わり方の共通点として、筆者は3人とも、(1)子どもの発達段階に応じた適切な環境を整えること、(2)子どもが安心して主体的に動けるような関わりをすることの2点を挙げた。子どもが自分の好きなことを選択し、主体的に取り組むには、選べるだけの種類の教材が子どもの手に届くところに準備されている必要がある。また、同じ場所に保育士がいることで、子どもは遊びに没頭し、完成した喜びを伝え自信に繋げることができる。0歳児に対しては高い声で歌を歌うことが、子どもに安心感を与えていた。整った場の設定の仕方や援助者の実際の関わり方は保育士と心理臨床家では異なるが、そのねらいは共通する部分があると思われる。

また、保育と心理臨床双方で、一人一人の子どもの性格や物事の取り組み方、興味関心について詳しく把握することが重視される。保育士は、母親が日中見ることのできない子どもの様子を母親に伝え、母親が我が子の社会的側面を知ったり、

見落としていた子どもの変化に気付く橋渡しをしていた。逆に心理臨床家は母親を通して、子どもの普段の様子についての情報を得ながら、どう関わっていくのが適切か検討する。母親と必要な情報を共有することが、それぞれの役割を十分に果たす上で重要になると思われる。

一方、心理臨床家にはない保育士の関わりとして、日常生活で必要な行為そのものに対する援助が挙げられた。心理臨床家が臨床場面で子どもと出会うのに対し、保育では「日常」の生活の中で子どもの発達を援助する。また、そこは多くの大人と子どもが共に過ごす集団場面である。このことから子ども達には一日の生活の流れにそって生活習慣を身につけることが重要となり、保育士の関わりは日常生活の一つ一つの行為に焦点をあてた直接的、指導的なものになる。例えばそれは0才児に対しては代理母のように世話をすることであり、3歳から5歳の幼児に対しては、社会的ルールを教え、基本的な生活習慣を獲得できるようにつけることであった。このような関わりは心理臨床家にはないものであり、それは子どもの成長としてアプローチするところの相違からくるものだと思われる。

また子どもにどのような援助が必要かねらいを立てる時、保育では年齢によって発達の側面に重点を置くが、心理臨床では同じ年代でもねらいとするところは一人一人違ったものになる。

今回の実習を通して、心理臨床の立場から援助できる領域と他の専門家が得意とする領域を理解することができた。このことは、今後他の機関と連携をとりながら仕事をしていく上で必要なことだろう。

### IV. おわりに

以上、保育園実習において、実習目的の3点に関連した報告と考察がなされた。筆者らは本論をまとめるにあたって、実習での体験を話し合ううちに、観察した子ども達はそれぞれ違っているが、そこで感じたことは、皆、共通していることに気付いた。それは子ども達の豊かな感性であり、筆者らは彼らに限り無い可能性を感じた。そして、そこから各自が考えたことを突き合わせ、まとめ



ることで、筆者らにとっての保育園実習の意味が明確になったように思う。今後3人が、どのような領域で活動するのか定かではないが、各自の原点となるであろう今回の実習での体験を大切にしたいというのが、3人に共通する想いである。

#### 謝 辞

今回の実習でお世話になりましたどろんこ保育園(天久薫理事長)の皆様にご心よりお礼申し上げます。また、脱稿にあたりまして、ご指導いただきました九州大学大学院人間環境学研究所野島一彦教授に深く感謝致します。

#### 引用文献

- Rustin, M. 1989 Encountering primitive anxieties. *Closely Observed infants*. Duckworth, 7-21.
- 村瀬孝雄 1993 臨床心理士・カリキュラムに期待する 心理臨床学研究, 11特別号, 1-2.
- 野島一彦編著 臨床心理学への招待 ミネルヴァ書房
- 野島一彦 1997 心理臨床家を目指す人に望むこと 九州大学心理臨床研究, 16, 1-2.
- 鈴木 龍 1998 論文指導の際のコメント.
- 山口義枝 1999 乳幼児観察の経験 身体交流の面から 心理臨床学研究, 17 (1) 34-42.